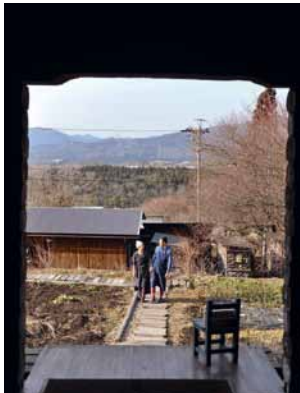




丸太で組まれたログハウスはまさに“山小屋”風だが、手描きの看板、親交のある作家のイラストや陶芸作品、ステンドグラスやランプなど、備えられた一つひとつにこだわりが込められ、空間を特別なものになっている。見晴らしのよい窓からの眺めも格別。ランチはプレートとパスタのほか、平日のみの「ごほうびランチ」や2日前までに要予約のコースがある。写真右の「冬のスーププレートランチ」は、スープとプレート（サラダ、自家製パンカライス付き）、デザート、コーヒーで1,500円（税込）

テーブルに運ばれてきた料理に、楚々とした美しさと力強さが宿る。大振りどころけるように柔らかく、とびきり甘い人参のフライは、頬張ると衣がカリカリと音を立てる。根菜や豆の滋味をしみじみ感じるミネストローネスープ。窓の外に広がる畑で採れた紅芯大根、バターナッツ、サツマイモや里芋が、サラダやラペ、ケークサレなどに姿を変えてプレートにぎやかに彩り、味わう客たちの目を細めさせる。

恵那市三郷町。遠くにアルプスを望む小高い場所に立つ「Yama5ya」。店主の山下俊治さん、知穂さんが畑で育てた新鮮な野菜を中心に料理を供するこの小さなレストランには、二人の穏やかな人柄が醸す満ち足りた気配が漂う。

大阪生まれの俊治さんと、栃木生まれの知穂さん。二人はそれぞれに旅をしていた沖縄で出会い、その後、俊治さんが働いていた栃木のフレンチベジタリアン「アンリコ」での偶然的再会を機に交際をスタート。そして、3年の修業を終えた俊治さんは知穂さんとともに大阪に戻り、店を開く場所を探し始

めた。だが、近辺の奈良や滋賀の里山に気に入る場所は見つからなかった。その頃、恵那市が主催する移住セミナーを知り、参加。「それから担当の方がすごくいい人で」。後日、担当者に誘われるまま恵那市を訪れ、1週間ほど滞在して各地区を巡った。心惹かれたのは何気ない自然の景色。「たとえば、あの木がっこよくない？ って感覚が二人とも似てるんです。恵那にはそういうのがたくさんあって」。名古屋をはじめ都市圏からのアクセスも、遠すぎず近すぎない。お客様に小さな旅をしながら辿り着いてもらえたら。二人は恵那市へ移住を決めた。

しかし、見晴らしや立地の良さから希望していた三郷町には、なかなか空き物件が出なかった。約1年、アルバイトを掛け持ちして資金を貯めながら、二人は三郷町へ通い続けた。その熱意が、周囲に伝わる。「二人で歩くと不審者と思われるって、議員さんが車に乗せてくれて一軒ずつ空き家はないか聞いてくれたり」ととりあえず何か食ってけて、いろんな人にたくさんご馳走にもなったね。遂に約30年間住

【移住の心得】

本気で移住を考えるなら、周りの人たちにも“本気を伝える”こと。その気持ちが伝われば、周りが協力してくれたり、動いてくれます。そして、迷っていることがあれば、“正直に話す”こと。あとは自分のやりたいことだけを通すのではなく、地域の慣習も大切に。私たちもお祭りや行事には積極的に参加しています。

居として大切に使われていたログハウスと1500坪の農地を譲り受けることができ、2年の準備期間を経て平成27年春「Yama5ya」がオープンした。

知穂さんが大切にしているノートがある。どんな場所に住んで、どんな店を開きたいか。訪れた場所の印象、問題点、好きな食器のリスト。あらゆることが記してある。その最初のページに描かれた、希望にあふれた理想。高台、畑に囲まれた建物、小さな家、ツリーハウス。二人がずっと、思い描いた夢。その暮らしは、今、ここにある。

それぞれの移住スタイル

岐阜に暮らすということ。

生まれ育った土地をはなれて、

岐阜で新しい生き方を始めた人たち。

そこには、夢があり、人やまちとの出会いがあり、

受け継がれた文化や雄大な自然があった。

それぞれの移住から見えてきたのは、

豊かな、岐阜らしい暮らし。

移住スタイル
01

畑の中の食堂
yama5ya

山下俊治さん・知穂さん

住

恵那市三郷町佐々良木1828-254

営

11:30~17:00

休

火・水曜

P

10台

☎

0573-28-2092



国内外を旅してきた俊治さんにはベジタリアンの友人も多く、「ベジタリアンもそうでない人も気を遣わずに、一緒にテーブルを囲める場所があれば」と、デザート以外の料理は、肉や魚、卵、乳製品を使わず、野菜や植物性素材のみで作る。「でも僕たち、むしろ肉が大好きなんです」と大らかに笑う二人

夢を叶える場所を見つけ

二人で始めた幸せな暮らし

建物の周囲に畑が広がる。二人が無農薬で育てる野菜は新鮮で、味も香りも抜群。三角屋根と煙突が可愛らしい夫婦の自宅の前には、手作りの小さなツリーハウスも



食事は農具小屋を改装した別邸で。外壁は宇城さんの故郷、淡路島でよく見られる「焼杉」の手法を用いている。米は宇城さんの祖父が作る淡路島産。かまどで炊いたご飯は香りが高く、ふんわりと優しい甘さを感じられる。「実は、この宿を次の人に託すことも考えているんです」と宇城さん。すでに出来上がったこの場所を、その人なりの形で新しく使ってもらうのも面白いと感じ、そんな人がふらりと現れるのを待っているのだそう



「家の前に小川が流れているのもイメージ通り(笑)」。鳥のさえずりや虫の音、木の静かなさざめき。自然の音色が心地よい

【移住の心得】

古民家はスタート時に完全に改修が出来ていなくても、その“不完全さ”が味になるので、店などを始めるにはおすすめ。金銭的に余裕ができれば、気になるところを直せば大丈夫です。ご近所付き合いは、完全に周囲に合わせるのではなく、自分を表現しながら相手の意見も受け入れる、歩み寄りが大切だと思います。

と聞かれて戸惑った。それからは外観や部屋の数、周囲の環境、大家さんまで、ひたすら具体的にイメージ。半年後、知人から紹介された家は、まさに思い描いた通りの古民家だった。たった6世帯の小さな集落で始まった新しい暮らし。住民が快く受け入れてくれ、その時々自然と力になってくれる人も現れた。床の貼り方を教えてくれる工務店の社長や暖簾に宿の名を書いてくれる書道家…。「ご近所さんが、季節ごとに掛け軸を持ってきてくれたり

ね」。皆が自分の夢に楽しんで協力してくれた。一つひとつのつながりが積み重なり、今の「陽がほら」がある。移住して10年経つ今も、かまどでご飯を炊く時間はワクワクする。気付けば、あんなに夢中だったカヌーよりも、ここでの生活そのものに魅力を感じていた。「暮らし、仕事、遊びがすべて一緒になった感覚だね」。

い時間の中で、穏やかな楽しみを見つける。そして夜になると、宇城さんを変えて自然と雑談が始まり、宿を始めたいきさつを知った客は、触発されたように自分の夢を話し始める。「その話を聞く時間が一番好きですね。宿のオーナーであることより、1000人以上の夢を聞いてきたことのほうがずっと価値があるんじゃないかな」。のどかな空気に心がほぐれ、夢が膨らむ小さな宿。人生をまっすぐ楽しむ彼の姿に、皆、きっと勇氣をもらうのだ。



築60余年経っていたが状態が良く、手を加えたのは床と暖炉のみ。夏はすぐ後ろにそびえる山から冷気が下りてきてクーラー要らずだ。モダンな内装がどこか懐かしく居心地が良い



暖炉のある談話室。縁側に座って自然を眺めたり、宿泊客同士で会話を楽しんだり。各々の時間が気ままに過ごせる

暮らし、仕事、遊びが一つに 夢を追って辿り着いた場所

美濃市の中心街から車で約10分。静かな山間にある『陽がほら』。オーナーの宇城智之さんが平成20年に始めたゲストハウスだ。宇城さんの出身は兵庫の淡路島。大阪で会社員をしていたある日、10年ぶりに趣味のカヌーをするため長良川へと赴いた。川霧が立ち込める中、川面を下る。すると、目の前に白鷺やトンビ、カワセミが次々と現れ、白いもやの中へ消えていっ

た。偶然起こった幻想的なひととき。大自然に身を置くカヌーの楽しさが蘇った。「突然、それまでの生活が色あせちゃって。その日から、毎日カヌーをして生活するにはどうしたら良いか、必死で考えました(笑)」。そこで思い付いたのが、大好きな長良川の河畔で古民家宿を始めることだった。早速、岐阜に住む知人や工務店に声を掛けたが、「どんな民家を探しているの」



腰を痛めてから川下りに行くことは減ったが、「カヌーがここまで連れてきてくれた」と宇城さん。宿泊部屋は4室。朝夕付きで大人8,000円(税込)。素泊まり、一棟貸切も可

移住スタイル
02

古民家ゲストハウス
陽がほら

うじろ
宇城智之さん

住 美濃市種ヶ洞3808
営業 チェックイン15:30～、
チェックアウト9:30
休 年中無休 5台
☎ 0575-35-0250
http://higahora.com/





移住スタイル
04

古民家で開く古本屋
庭文庫

中田実希さん

住 恵那市笠置町河合 1462-3
http://niwabunko.com/
niwabunko@gmail.com

※「庭文庫」は2018年4月28日(土)にオープン。
営業日時などはWEBサイト、
facebookページ、Twitterにて要確認

「私、きちんと計画して行動するより、走りながら考えるタイプなんです」。そう屈託なく笑う中田実希さん。沖縄で生まれ育ち、大阪の大学を卒業後、東京のイベント企画会社に就職。仕事はやりがいがあったが、毎日の過酷な満員電車での通勤に2年で疲れ果ててしまった。そんな頃、友人を介して出会った百瀬雄太さんに「フォーリンラブしちゃって(笑)」。

二人で恵那市に移り住み、平成28年10月に協力隊に着任。現在は移住定住コンシェルジュとして、恵那市ぐらしビジネスサポートセンターに勤務し、年間100件を超す空き家や移住の問い合わせに対応している。

自身も移住者としてこのまちに暮らして気付いたのは、山の美しさ、田んぼで育つ稲の逞しさ、その土地のものが食べられる有り難さやその美味しさ。反面、若い人が集える場所は少なく、暮らしに慣れようと思った草木染めサークルでは、おばあちゃん達の友達がたくさんで、きた。「ここではいろんな人が集まる文化的なコミュニティを探してアクセスすることが難しくて」。そんな場所を一つでも作れたら。幼い頃から本が大好きで、本や詩集に救われたことが何度もある。縁あって巡りあった築100年余の古民家で、古本屋を始めようと思い立った。同じ想いを持つパートナーの百瀬さんと、今春の開店に向け準備を進める。「将来は民宿もできたら。だって泊まれる古本屋さんがあったら、いいでしょう」。やりた



10年以上空き家だった農家の建物は、まだまだ改修作業の真っ最中。今年7月に結婚を控える中田さんと百瀬さんは、ひとまず古本屋をスタートし、将来的には宿の運営も目指す。2階の窓からは木曽川と山々、赤い橋を望む

【移住の心得】

移住する前にできる限り、建物だけでなく地域の人と顔を合わせて話すこと、特に地方では都市部とは生活も習慣も違うということを理解して楽しむことが大事だと思います。それから、一緒にご飯を食べたり、遊んだりできる友人や知り合い、好きな人が、一人でもその地域にできれば、とても心強いと思います。

築100年余の古民家を

多くの人が集う古本屋に



走りながら考える。それが彼女らしい生き方だ。

深い緑色を湛える木曽川と段々畑を目の前に見渡す古民家で始まる古本屋「庭文庫」。そこは二人の手で、そして訪れる人たちとともに、物語や言葉や、笑顔や語らいや、文化や音楽があふれる場所へと生まれ変わっていきこうだろう。



古本のほとんどは、近所の人から託されたものや、二人のTwitterなどでの呼びかけに応え、宮崎や熊本、東京など日本各地から送られてきたもの。「たくさんの方に応援してもらえて本当に嬉しい」と中田さん

【移住の心得】

岐阜県立森林文化アカデミーへの入学をきっかけに移住し、そこから縁がつながって今の私があります。だから、目の前のチャンスや転機をどう生かすかが大切なんだと思います。そして私の場合は竹細工ですが、「志したことを本気で続けること」。移住した理由や、自分がどう生きたいかがはっきりしていれば、ずっと頑張っていけるはずですよ。



竹細工を始めて6年。「順調に注文がいただけるようになりました」と安藤さん。自ら竹細工教室を開くほか、所属するNPO法人グリーンウッドワーク協会主催の講座で講師も務める



「仕上げの美しさなど、女性ならではの感性が作品に表れています」と、竹細工の師匠である鬼頭さんその腕に太鼓判を押す



1300年以上の歴史を持つ、ぎふ長良川鵜飼。この伝統文化を支える、若き竹細工職人がいる。4年前から、鵜飼で用いる、鵜籠^{うかご}の制作を担う安藤千寿香さん。美濃市内の工房を拠点に、鵜籠をはじめてとした竹細工の製作に励む。

安藤さんは兵庫生まれ。和歌山の大学を卒業後、木造建築を深く学びたいと美濃市にある岐阜県立森林文化アカデミーへ入学。その後、一旦は和歌山で働くも、アカデミーの同期から声が掛かり、美濃市のNPO法人グリーンウッドワーク協会に勤務。そこで竹細工を製作する鬼頭伸一さん

と知り合ったのが、竹細工にはまるきっかけとなった。

竹を伐採して竹ひごを作り、それを均等に編み上げていく。「初めはすべてがうまくいかなかった。でも、だから面白いと思ったんです」。すぐに没頭し、仕事の傍ら、週1回のペースで鍛錬を積んだ。9カ月が経った頃、「もっと竹細工をやる時間がほしい」と、遂には竹細工を中心とした働き方に転向。それからは朝から夕方まで工房で作業に熱中し、夜はアルバイトで生活費を稼いだ。「辛くはなかったです。やりた

いことをやれていたのです」。その頃、県内に鵜籠を作る職人がいなくなるという問題があった。唯一、その技を継ぐ関市在住の石原文雄さんが体調を崩し、引退せざるを得なくなったのだ。鵜籠に求められる美しい形と実用に適した強度は、手仕事だからこそ実現されるもの。その技を途絶えさせまいと、安藤さんと鬼頭さんは、石原さんの鵜籠の再現に尽力した。なんとか納得のいく形に辿り着き、初めて鵜籠を納めると、「うん、良い出来栄えや」と鵜匠。職人としての自信につながった。現在は結婚を機にアルバイトを辞め、「一層、竹細工に集中できています」と生き生き

とした表情を見せる安藤さん。美濃市には、和紙職人やアカデミーの卒業生など、同じように夢を追う仲間が多く暮らす。「その姿が背中を押してくれたこともありました。好きなことを生業にする。それは楽ではないが、自ら決めた道だ。安藤さんは今日もまっすぐに、竹と向き合う。」

移住スタイル
03

竹細工職人

安藤千寿香さん



この地に息づく伝統工芸

竹細工を生業にする



〔安藤さんの竹細工が買える場所〕

THE GIFTS SHOP
住 岐阜市橋本町1-10-1 アクティブG 2F
☎ 058-212-3255
https://giftshop.jp/
長良川デパート湊町店
住 岐阜市湊町45
☎ 058-269-3858
http://nagaragawadepart.net/

移住スタイル
05

海外から移住

ペーウィッグ・ジョシュアさん
ペーウィッグ・翠芳さん

サンフランシスコ
▼
郡上市



温かく迎えてくれた

郡上八幡のまちと人々

結婚を機に、サンフランシスコから日本に移住したいと考えていたペーウィッグ夫妻。住む場所を探すために幾度も日本へ足を運び、各地を巡ったが、どこも決めに欠けた。そんなとき、知人の誘いで訪れたのが郡上八幡だった。「伝統的な暮らしが魅力的だったし、人の雰囲気も良くなって。お互い、住むならここだって「直感」したんです」。

郡上で暮らすなら町家に住みたいと、2人はまず、サンフランシスコからメールでチームまちやに相談。「海外に住んでいた、家の借り方も何も分からなくて。でも担当の方が親切に相談のってくれて、順調に準備が進みました」。初めて郡上を訪れた4カ月後の平成28年10月には、最低限の荷物だけを持って移住。ひとまずチームまちやの紹介でお試し町家に入居し、すぐに気に入った物件を見つけて本格的にこのまちでの生活を始めた。「近所の皆さんは道で声を掛けてくれたり、作った野菜を分けてくれたりと温かい人ばかり。やっぱり、直感は間違ってたかったです」。



ペーウィッグ夫妻
ツアーガイドの仕事をしてからフリーランスで映像制作を行うジョシュアさん。翠芳さんは、自宅でフェルデンクライスメソッドという身体訓練法の教室を開く。



1. チームまちやが改修を手掛けた物件に移住したペーウィッグ夫妻。建物の大家である齋藤英樹さんと瀧日敬子さんも、「空き家を活かしてくれて本当にありがたい」と笑顔を見せる 2.3. まちなかの空き家を見学するツアーを年に3回実施



4.5. チームまちやの手でリノベーションされ、平成28年にオープンしたカフェ「ラシェーズまちや」。レトロな雰囲気の店内で、手作りパンやマフィン、チーズケーキなどが味わえる

果となつて表れている。これまでに改修が完了した19軒のうち、17軒に入居者が決まり、40人近くの移住者が郡上八幡で新しい暮らしを始めている。移住を考える人が短期滞在できる「お試し町家」として活用されている残りの2軒にも、入居希望者が後を絶たない。さらに、チームまちやの活動を知り、その事例を参考に自ら住みたい空

き家を見つけて移住するといったケースも現れ始めた。こういった動きにより、空き家の増加は歯止めがかかり、その数は減少に転じる見通しも出てきている。「移住者も地元住民も隔てなく暮らせるまちを目指したい」。多くの人に愛される美しいまち並みも、そこに暮らす人があってこそその風景。それを、小さなチームが守っている。



山崎寛功さん

学生時代、自転車旅行やヒッチハイクを行い、その中で訪れた徹夜おどりの迫力に魅了され、埼玉から郡上市に移住した。

武藤隆晴さん

郡上市役所に37年間勤め、基盤整備やまちづくりを担当。培ったノウハウを生かし、チームをまとめるリーダー的存在。

猪股誠野さん

宮城出身。大学で景觀デザインを専攻し、研究の一環で訪れた郡上八幡に移住。まちの在り方について研究を続ける。

チームまちや
のメンバー



郡上市八幡町にある空き家を持ち主から借り受け、リノベーションして移住者へと貸し出すまでを行う「チームまちや」。彼らの取り組みが、古くからの城下町に新たな活気を生み出している。

チームまちや

郡上市八幡町新町939 町家玄麟別館2F
0575-67-9027
<http://machiya.gujohachiman.com/>

郡上おどりをはじめ、古くからの文化が人々の暮らしの中で大切に受け継がれてきた郡上市八幡町。通りに築100年を超える町家が軒を連ね、風情あるまち並みが今も残されている。しかし昨今、少子高齢化などを背景に町家に住む人口が減少し、空き家の増加が大きな問題となっている。郡上市の調査では、平成12年に207軒だった空き家は、平成25年に353軒にまで増加。当時、郡上市役所に勤めていた武藤隆晴さんは、その現状に直面し、対策に乗り出した。「この空き家を活用して、どうにか移住者を呼び込めないか」。そして平成27年、郡上八幡産業振興公社に空き家対策を専門に行う「チームまちや」を発足させた。

チームまちやは、その業務のすべてをたったの3人で担う。「うちの空き家、どうしたらいいんやろう」。持ち主から相談を受けるとまず、再生可能な物件かを調査。条件を満たしていれば10年間の契約で借り受け、きつかけに郡上へ移り住む人や、自らの店を開く人も出てきた。「ちよとした働きかけで変化が起こる。地域の中に入ってみて、やっぱりまちは人で出来ているんだなって実感しました」。

発足から3年。チームまちやの取り組みは確実に成

リノベーションを行った上で移住者へと貸し出す。そして移住者にもらう家賃から所有者へ払う賃料を差し引いた収入を、改修費や運営費に充てる仕組みだ。

この取り組みを周知させようと、発足当初から主催するイベント「町家アイデアナール」では、県内外から多くの出店があるほか、改修前の空き家を巡るツアーや、この地ならではの手仕事体験ができるワークショップなどが行われる。移住者も地元住民も、遠方の出店者や観光客も。誰もが垣根を越えてつながり、まちを盛り上げる。

「空き家問題はまち全体の課題。イベントを通してそれを共有できれば」と猪股誠野さん。最近はこのイベントを